

プロメテウスの罠

1463

土よ①

飯館村に実りの秋

10月3日、福島県飯館村。菅野宗夫(64)は稲刈り機をブルルトといわせた。黄金色の田んぼに、トンボがふわりと舞った。収穫するのは、市場に出荷するここのないコメだ。

道路の向こうで除染作業員が雑草を刈る音を響かせる。15000平方メートルほどの菅野の田んぼだけが、実りの秋に輝いていた。

東京電力福島第一原発の事故で、村は避難区域になった。原発からいくつも山を越えた高原の農村に、放射性物質は容赦なく降った。約6千人の村民はいまも、29都道府県と海外に散らばっている。

菅野は2012年、田んぼを自分の手で除染した。ボランティアや研究者らと立ち上げた「ふくしま再生の会」で知恵を出し合った。

国による本格的な農地除染が村で始まったのは今春だ。一般食品に含まれる放射性セシウムの上限は、食品衛生法で1キログラムあたり1000ベクレルとされている。菅野が除染した田んぼでとれた白米は12年産でも10ベクレル以下だった。それでも、地域全体の農地除染が終わらない限り出荷は認められない。それが村の方針だ。菅野も、多



試験田の稲を刈る菅野宗夫さん

れぞれ管理計画を作る。除染を終え、セシウムの吸収を抑える対策をしていることが条件だ。今年作付けしたのは、村役場と、菅野ら再生の会だけだった。稲刈りをしていた菅野は、田んぼの半分ほどで手を止めた。残りは、ボランティアたちに譲り刈る体験をしてみよう。

「楽しみながら、でも無理しない。手は刈らないでくださいわね」

今年40人ほどが集まった。インドネシアの留学生は「福島は正確な情報を知りたい」と昨年に続いて参

加した。故郷に原発の建設計画があるという。落ちた穂を一本一本拾う人を見て、菅野はうれしくなった。

「気持ちよく収穫の秋を迎えられたいなあ」

コメと野菜をつくり、和牛の繁殖を手がける。父と妻、息子夫婦と孫2人の4世代7人暮らし。その生活が、変わった。

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1464

土よ②

おやじの生きがいだ

原発事故で、今も農産物の出荷が制限される福島県飯館村。しかし、菅野宗夫(64)は避難先から通いながら、ボランティアと一緒に独自に除染した自分の田んぼで稲を育ててきた。

10月3日、稲刈りを終えると、直径10センチほどの木の棒を、どすどすと田んぼに刺した。稲を掛けて干すための杭だ。機械

で短時間に乾燥させるより、この方がおいしい、と菅野は思う。原発事故まで、そうやって稲を干す風景が村のあちこちで見られた。

ボランティアは地面に穴を開けたり、ハンマーでたたいたり。何も使わずに杭を立てた菅野は、すっかり感心されて、思わず照れた。

「うちの親には『本当に大丈夫か』って確かめられるんだ」

翌日、菅野は父の次男(92)を連れてきた。次男は早速、タオルを頭に巻いて田んぼに入ると、なだて杭を整え始めた。

作業後は車座になったの屋敷だ。へはああー

次男は立ち上がると、張りのある歌声を響かせた。少し酒が入って、顔がほんのり赤い。

「飯館よいとて、そなたそなたぞうだ、おちがあ里ー」

佐須地区にある、この田んぼも、自宅がある場所も、次男が戦後、開墾した土地だ。



歌う父を見守る宗夫さん(右端)

戦中は朝鮮半島や台湾に出征。機銃掃射に襲われ、横たっていた杭木の隙間に体を押し込んで命拾ったこともあった。

故郷へ引き揚げ、この土地をひらいた。牛を飼って酪農も始めた。自宅の囲炉裏は掘りこたつに変わった。柱は当時のままだ。

そんな父・次男に対して、菅野はずっと悔やんでいることがある。

震災翌月の2011年4月、自宅脇のミニクワッドで草むしりをしていたところを、「何やってるの!」と強くどがめてしまった。

被曝を避けるため外に出ないよう言われていたときだ。振り向いた次男は、血の気のない顔をしていた。家族が食べる野菜をつくること、土をさわるのが生きがいなんだと思いはらされた。

「おやじの人生、このままで終わらせたくない」

田んぼを貸してくれる人を探し、宮城県で見つけたが、飯館の土地をあきらめることはできなかった。

「本当にだめだ」と科学的なデータはない。チャンネルじゃない言るのは嫌だ」

(菅野有希子)

プロメテウスの罠

1465

土よ③

18人がやってきた

福島県飯館村は2011年4月22日、計画的避難区域に指定された。そのときすでに福島第一原発の事故から1カ月以上たっていた。だが、6月に入っても、菅野宗夫(64)は約80メートル離れた一時避難先の福島市の端から、毎日のように軽トラックで村に通った。行き先が決まっていなかった世話をしたためだ。放射性物質で汚された山や田畑を

見て、ずっと考えていた。「何か自分で出来ることはないか」

放射能を取り除く方法を試したい、何人も村外からやって来た。しかし、だれも長続きしなかった。田尾陽一(74)ら18人が訪ねてきたのは、そんな時だった。

田尾は東大大学院で物理学を専攻後、ITのベンチャー企業を立ち上げ、セキュリティシステムの開発

や管理に携わった。4歳の時、疎開先の広島で被爆。爆心地から9キロの所にいた。学生時代、自分がどれくらい放射線を浴びたのか計算してみた。丘などに遮られ、ぎりぎりのところで直射を免れたとわかった。

福島第一原発の事故後も、自分なりに情報を集めた。一方で、定期的に会っていた学生時代の仲間と話す



田尾陽一さん(左)

うちに、現地に行ってみようということになった。学生運動を経験し、70歳になろうとしていた。その人生が問われていると感じるほど、福島

の事故は衝撃だった。

6月5日、東京からレンタカーで福島入りした。いわき市や相馬市で津波の被災地を見た後、飯館村に向かった。

村の風景は緑豊かな農村そのものだった。だが近づくと、線量計がピーピーと鳴りだした。

知人から紹介されていた菅野の自宅を訪ね、居間の掘りこたつを18人で囲んだ。

田尾と訪れたのは、医師や国際関係の研究者、元教師、定年退職した会社員ら。

彼らを前に菅野は言った。「私は人災だと思っています」「作る技術があったら、抑える技術も両方伴って完成された技術じゃないですか?」

自分たちが役に立っている場所を探している田尾が言うと、菅野は「一緒にやってみよう」と即答した。再び村で農業をしながら暮らせるように。その挑戦のために、自宅や農地を活動の場として貸すと言った。

この時の出会いが「ふくしま再生の会」に育っていく。

(菅野有希子)